18.「27」

「YUKI、お誕生日おめでとう!」

1999年2月17日、YUKI 27回目のバースデーには、いつもの顔ぶれがいつものイタリアン・レストランの小さなテーブルにそろっている。

「YUKI、あのプロジェクトの仕事ってもう始まってるんでしょう?」

少し気にかかっていたのだろうか、いつもならYUKIの仕事にさほど関心を示さない友人たちが、珍しくそう訊いてくる。

「そうだねえ。始まってはいるんだけど……でも、これからだね」

これからが大変。そう思うと、YUKIの口調もペース・ダウンする。

「しっかし、ホント大変だね、ひとりで動くって。よくわかったよ、今までいかにTAKUYAや恩ちゃんや公太さんに助けられてたか」

「ま、それはそうだろうけどさぁ」

「いい歌うたうぜって、あたしはそれだけ考えてれば良かったもんね」

「いいじゃない、それで。YUKIはそれでいいじゃん」

「うん、ま、頑張るよ。それにあたし、ギャルバンもやりたいし、sleepのこともやりたいしさ。いろいろあるんだよね、思ってることは。そうだ、ねぇ、これからあたしのことは<ニナ>って呼んでよ」

「え?　なに?　にな?」

「そう。27才だから、<ニナ>!　なんちゃって——っ」

<ニナ>が、そのままプロジェクト名になったのは、YUKIの誕生日が過ぎて数日後のことだった。

昨年の秋、YUKIはサウンド・プロデューサーの佐久間正英からThe B-52’sのケイトと一緒に歌ってみないかと誘われた。

「面白そう！ 一緒に演ってみたい！！」

そのプロジェクトで歌をうたうときは、YUKIではなく、Ninaの名前で出ようと考えていたのだが、「Happy Tommorow」が完成するまでの間に、いつのまにかそれがプロジェクト名になっていた。

Nina——メンバーはケイト、YUKI、佐久間正英、島武実、そしてミック・カーン、スティーヴン・ウルフも参加することが決まった。

２月の上旬テープをもらい、詞のテーマを考えていった。上がってきたバック・トラックに合わせてどんどん歌う。メロディを考える作業は、自分のなかの新たな可能性との遭遇であり、もっと向上させていきたいと、YUKIの1999年の目標のひとつとなった。

ケイトとどうコミュニケーションをとるかでは、最初はさすがにあたまを悩ませた。Eメールも始めていなかったし、国際電話で話をするほど、英語にはまだ自信が持てなかったからだ。

(こんなんでバンドとかできるのかなぁ……)

５月、全メンバーそろって河口湖で行った合宿では、レコーディングは順調に進み、バック・トラックはほとんどここで録り終えたが、YUKIは思うようにメンバーとコミュニケーションがとれなかった。

(言葉なんて音楽をやるうえでは関係ないって言う人もいるけど、それは違う。やっぱり言葉が通じないと無理だ)

正直言って、打ちのめされた気分だった。ミュージシャンだけでなく、レコード会社のスタッフもほとんどが初めての顔ぶればかり、英語でも日本語でも、とにかく言葉を交わして伝え合うということの連続だ。YUKIはJUDY AND MARYがデビューしたころを思い出す。

(歌で納得させたほうがいい。とにかく歌を頑張ろう)

YUKIはケイトのことを知っていたが、ケイトにしてみれば、言語の違う、しかも自分よりずいぶん年下の、初めて知るボーカリストだ。最初にレコーディングに入ったとき、YUKIは強烈に緊張していた。

しかしケイトはごく普通に、YUKIに接した。対等に扱ってくれた。何より、佐久間正英と一緒に作った「Happy Tommorow」をケイトが歌っている、それ姿、その歌を聴いてYUKIは感動した。

(本物だぁ!　あたしが仮歌でうたってたのと、雰囲気が違う!!)

かえがたい喜びを、YUKIはそこですでに手にしていた。

となれば、さらにいい歌を自分もうたおう!その思いを胸に、6月、YUKIはケイトの暮らすウッドストックへと出かける。

ウッドストックでは残りのバック・トラックを録り終えると、佐久間もレコード会社のスタッフも日本へ帰ってしまい、ボーカル・ダビングはケイトとYUKI、エンジニアのトムとアシスタントのブランドンの４人だけで行われた。スタッフは通訳のアミと、マネージャーの柚上だけだ。

いつもバンドで動いているYUKIにすると、こぢんまりしたレコーディング所帯ということになるが、それが逆に彼女をリラックスさせた。

美しい草花だけでなく、野菜まで自家栽培しているケイトの家の庭は、YUKIのお気に入りの場所だった。朝はジョギング、休日にはトレッキングと、ケイトはヘルシーな生活を送っている人だった。

(だからケイトは、今もこんなに体力があるんだ!)

YUKIはボーカリストとして多くのことをケイトから学らんだ。

毎朝、ごはんを食べて、音楽を聴きながら机に向かい、その日やることをノートに書き出す。歌詞の手直しなどをして、アパートを出る。

果物屋と花屋が一緒になったジュース・バーに立ち寄り、そこで好きな果物や野菜を選び、ジュースを飲んで、スタジオへ。

ときにはスイート・スーという名前のカフェへ、トムと一緒に朝食のパン・ケーキを食べに出かけたりもした。日本語のまるでわからないトムと、英語を猛勉強中のYUKIだったが、十分通じ合えるものがあった。ケイトやトムと一緒にいると、言葉はもちろんだが、何より言葉にするまでのYUKIはとても大事にするようになった。

日本語で会話を交わすように饒舌にはいかないぶんだけ、気持ちや意志というものを明確に持っていないと相手とはコミュニケーションできない。所詮、言葉では伝わりきらないのだからと諦めてしまったら、本当にそれでおしまいなのだということをYUKIは痛感していた。

「YUKI、もう少し、時間がかかるよ。待たせてしまって悪いね」

ケイトと長く仕事をしているだけに、トムはケイトの歌入れのペースも、彼女の扱いも熟知していた。ケイトはYUKIの何倍も時間をかけて歌を録る。こだわりもすごいが、YUKIが何より驚いたのは、細部まで逃さずチェックするケイトのその耳だ。

「YUKI、今のところ、少しフラットしているわ」

「……え?　そうかな」

それは自分ではまったく気づいたことのない、むしろYUKIとしてはこれまで気に入っていた音程のとり方だった。

「いえ、YUKIはそこへいくとき、必ずフラットしている」

よく聴いてみた。何度もトムにフィードバックしてもらう。

(本当だ。……ホントだ、すごい、こんな細かなところなのに)

そんなふうにしてケイトの歌入れに立ち会っていると、どういう理由で、なぜここまでじっくり丁寧に録っていくのかがわかってくる。

YUKI自身、自分の歌に対して厳しくなる。知らず知らずのうちについていた自分の歌の癖についても、正面から向き合うことができた。

ウッドストックでの最終日には、ケイトの友達がバーベキューの用意をしてガーデン・パーティに招いてくれた。日本チームはごはんを炊いておにぎりを作り、茹でたてのそばもケイトたちに大人気だった。

「ウッドストックへ、いつでもまた帰ってきなさい」

ケイトの友人であるジョンが、そう言って小さなYUKIを抱擁する。

YUKIは笑顔で応えると、大切なふたりに感謝の気持ちを伝えた。

「ありがとう、ケイト！　ありがとう、トム!」